土井英司先生の ウォッチ力

徹底した物まねと素直さ、ツボを押さえたファッションで勝負せよ！

雰囲気勝ちの壁

尊敬できて一緒に飲みに行けるくらい仲のいい元上司と、ビジネスライクな付き合いしかできない現上司。まねをするならばどっち？

Ⓐ 元上司は社会人としてはもちろん、プライベートでも一目置いている人。まねしたいのは絶対こっち！

Ⓑ 会社で現在、長時間一緒にいるのは今の上司。仕事だってできない人じゃないしこちらをまねすべき

エリエス・ブック・コンサルティング代表。ビジネス書評家、ビジネス書を専門に著者のブランディングやプロデュース、出版戦略などを手がける。愛用携帯ストラップは、自身が気に入っている歳時のノベルティ

会社でうまく渡っていくコツといえば、ズバリ上司と仲良くなること！ 究極は某釣り漫画のハマちゃんとスーさんのごとき関係だが、あそこまでいかなくても、「まあ、ちょっと目をかけてやるか！」くらいは思われたい。

「上司と良好な関係を結ぶのは簡単。まず上司のことをトコトンまねすればいいんです。服装しかり、会話の語尾しかりです！」

こう話すのは、アマゾン・ジャパン時代には『ユダヤ人大富豪の教え』、『もえたん』など数々のベストセラーを仕掛け、現在はビジネス書評家、出版コンサルティング会社代表として活躍する、土井英司氏。

「例えば上司が細身でグレー系のスーツが好きなら、自分も似た系統のものを着る。上司の語尾が『～ですよね？』ならば、『～ですよね？』と言ってみるんです」

人間は格好や言葉で判断する動物。自分に近しいものを感じると、それだけでまず好印象に！ しかしここで気をつけるのは、まねするのは〝仲のいい上司〟ではなく、〝現在もっともビジネス的に関わっていて、それほど知った仲ではない上司〟なこと。

「もともと仲のいい上司とは、すでに絆がありますからね。それよりも、自分をビジネスシーンで引き上げる力のある上司に、もっと好意を持ってもらう努力をすべきなんです」

あとは〝素直さアピール〟で、トドメを刺せばOK！

「もらったアドバイスは、素直に即実践が基本。事後に報告すると、『やったんだ！』と喜ばれますよ。『やってみたら効果ありました。ありがとうございました！』なんて言えば、さらにどんどんアドバイスがもらえます」

土井氏の携帯ストラップには「絶対にゆるまないネジ」がついている。自身のこだわりがある分野に話をもっていくきっかけづくりに活躍する

わからないことも、ためらわずに聞いたほうがベター。教えてもらうことで、新たなコミュニケーションが生まれる。

「心理学で『単純接触の原理』というのがあります。いっぱい接触すると、相手のことが好きになるんです」

上司の無意識下に訴えることで、〝職場の愛されキャラ〟の雰囲気が、いつの間にか自分のものに！

ちなみに、初対面の人に好印象を与える方法も、実にカンタン。

「清潔感に嫌悪を抱く人はいません。そして清潔感を保つには、『端っこ』に気をつければOK」

すそ、そで、えり、指先のツメ、靴のつま先などの端っこを手入れすることで、ビシッとした印象を植え付けられるのだ。

「急ぐときは、シャツはそでとえりだけでもアイロンを。最低限見えるところをやればOKです（笑）」

ツメも、女のコのように甘皮処理までする必要などはなく、短ければそれでいいという。

「さらにやる気が出ないときには、姿勢を正して、身体だけでもデキる風にしましょう。いつの間にか心もそれに引きずられ、目に光が戻ってきますよ！」

疲れた目の客先回りも、これだけ準備すれば完璧。有能な雰囲気を振りまこう！

上井先生のウォッチ力メソッド

お近づきになりたい直属上司をコピー

まねをする際は完ぺきでなくても、土井氏の携帯ストラップのように、ワンポイントだけ自己主張を入れても、「会話の糸口になり、自己アピールの機会もつかめます」

素直さ前面押しで仕事をガンガン覚える

「大企業では、入社3年で将来性出せるかどうか決めるとう。判断基準は、素直さだそうです。わからないことを伝えてこそ、新しいことを吸収する力が育つのだ」

身体から入ることで気持ちは後を追う

背筋を伸ばし、前のめりな話を聞き、考えるときは上を向く。だけでは、なかなか気は吸い戻りません。身体を動かせば、案外心はついてきます」

街場の雰囲気勝ちな人々

自らの雰囲気を最大限に生かし、仕事やプライベートを充実させている人たちを直撃！

デブ・ハゲ・チビ（DHC）の三拍子！ それでも「人たらし」のワケ

「暇潰しの相手みたいに思われてますね（笑）」と自己分析

パチンコ店に勤める田中勉さん（仮名・26歳）は、仕事ができないのになぜか上司に溺愛されるという。

「上司に呼び出されて怒られると思ったら、『お前が遅刻すると俺がつまらなくなる』って言われて。『えっ!?』って感じでその場は応対しましたが、心の中ではガッツポーズでした（笑）」

さらに、常に金欠なのに、なぜか飲み会の出席率は100％とか。

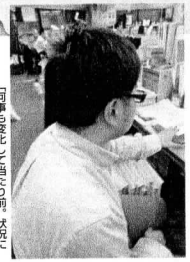
「先輩たちに飲みにより誘われるのですが毎回『お金がないんで』と断ろうとすると、『カネなんか気にすんな』いってて言われて。結局いつもペコペコついてってご馳走になってます。そしたらこんなお腹になりました。（お腹肥ぶりさし）ここについているのは脂肪じゃないんです。みんなの愛なんです（笑）」

とくったくなく笑う田中さん。

身長160cmで68kgの自他共に認めるデブ、ハゲ、チビ（自称DHC）なのに、常に彼女がいるのもナゾ。

「自分でもわからないのですが、奇跡的に彼女がいつもいます。今の彼女（年上）は、『ブタみたいでかわいらしい』って言ってくれるんですが、どうなんでしょう。雰囲気うんぬんじゃなくて、もはやペット的なポジションのような気がしないでもないですけど（苦笑）」

大手広告勤務＆役者スカウト。流され上手のシンデレラボーイ



「何事も変化して当たり前、状況に合わせます」と、柔軟な梅田さん

大手広告代理店の新入社員、梅田伸一さん（仮名・24歳）は、多忙な身でありながら、舞台役者としても活躍、という二足の草鞋を履いている。

大学時代、ファンとして観劇していた劇団のワークショップに参加したところ、その才能を買われてキャストにスカウトされたという。どんだけエリートなんだ！ とヒネくれたくなる気持ちを抑えて、その成功哲学のエッセンスを聞いてみた。

「そんなに特別なことしてないですよ。両立をすることで、普通の人が当たり前にやってる食事や睡眠をほぼできてないですし。他の人が生活に割く時間を、仕事や芝居に使ってる。正直キツいけど、辛い、ではないですね」

こうも余力がない生活だと、芝居の練習をしたいのに、仕事が終わらない等、もどかしいことも多いのでは？

「それは苦ではないです。芝居って何でも肥やしになるので、仕事の時間も、広い目で見れば芝居の役に立つ。仕事と芝居の線引きをせず、敢えて状況に流されて、それすらも楽しんでいます」

頂なに、〝俺はこうしたい！〟と意思を持ちすぎないのが、自分を苦しめず、なおかつ周囲にも付き合いやすいと思わせるのだろうか。

線引きせず柔軟に柔和な空気を

目標に向かう意志の強さがデキ男の基本のように思っていたが、敢えて周囲に流されるゆとり感こそ雰囲気勝ち組の基本なのかも。ゆとり〟も要は使いよう

〝おちゃらけ感〟と〝愛くるしいキャラ〟

コンプレックスとなる要素を逆手に取った人畜無害な印象はまず嫌われることはなさそう。さらにこれに一ギャップあればかなり雰囲気巧者といえそうだ

「落ち着きぶり」が功を奏し 20代にしてフリーランスFPに

「自信満でいる緊張感も、もしかしたらプラスなのかも」と苦笑い

経験の豊富さや実績が重視されるファイナンシャルプランナー（以下FP）の世界で、その落ち着いた雰囲気が功を奏して、20代の若さでフリーランスとして活躍している伊藤亮太さん（29歳）。独立してから3年で、すでに大学や大企業の講師、新聞の連載など、多数の仕事を抱えている。

「僕なんて全然大したことないです！ 知名度や肩書がないから、いまだに営業しても先方のアポすら取れないし。でも、仮にアポが取れたら僕が絶対にやるのは、まず自分のレジュメを持っていくこと。自分にできることを文字にして持っていくと、相手にもわかりやすいし、自分の手の内を最初に明かすと、この人は信用できる人、という印象を相手に持ってもらえるんです」

確かに仮にそのときには仕事にならずとも、別の機会に思い出して、声をかけてもらえる可能性が高い。

「あとは、絶対に断らない雰囲気をつくること。仮に専門外のことをお願いされても、『それは無理だけどこれならできます』と代案を出す。相手にも喜ばれるし、『この人に相談すればなんとかなる』と思ってもらえますから」

劣勢でもNOと言わずに自己PRの機会に変える。その機転こそ肝要だ。

相手への誠意が安心感に繋がる

自分では対応できないことであっても、代案やヒントを投げることで、「この人に相談すればなんとかなる」という安心感を周囲に与えられるのかもしれない

奥深き雰囲気の世界。〝デジタル雰囲気〟も今後は重要に!?

「雰囲気勝ちになってやる」と飛び出した結果、期せずして多くの人にその術を伝授してもらうことができた。当初は、「雰囲気なんて持って生まれたものじゃねーか」と疑心暗鬼にかられていたが、知るにつれて極めてテクニカルな世界だと実感。今回は主に職場での汚名返上を狙ったため仕事上重要になってくる局面での話が中心となっていたが、人間関係が生まれるところに（というより他者とのかかわりが生まれる瞬間に）雰囲気なるものの存在が浮かび上がるはず。もちろん雰囲気だけで行動や考え方が伴わないようだと「見かけ倒し」ならぬ「雰囲気倒し」になる危険性も気をつけなければいけない。

あとは仕事でもプライベートでも欠かせないメール。そしてfacebookやTwitterなどのウェブサービス。さまざまな場面でこれらへの依存度が高まるにつれ、今後はさらにデジタルツール越しに伝わる雰囲気も人を評価するポイントとなっていきそうだ。

つまらない講釈はもういらないと件の先輩。「雰囲気勝ち」の英才教育を受けてきた僕。もう残念な雰囲気なんて言わせませんよ。

取材・文／中尾巴　加藤カジカ　藤村はるな　中川謙次　朝井麻由美　江口裕人（本誌）
取材協力／長友慎治　マンガ・イラスト／市橋俊介